

埋蔵文化財最新発掘調査情報

◆朝霞市では、現在69か所の遺跡が存在しています。

川や緑が多く都心にも近い朝霞市においては、宅地造成やマンション建設など大規模開発工事が多いため、記録保存のための発掘調査が数多く行われています。そのなかで、最新の調査成果をお伝えします。

むかいやまいせき 向山遺跡第10地点

調査地：朝霞市岡三丁目地内

期間：令和2年5月20日～12月11日

調査面積：1,726.83㎡

◆今回の調査では、住居跡、方形周溝墓、溝状遺構、屋外炉、土坑、集石遺構、ピット等が確認されました。

遺物は、旧石器時代の石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄製品、土製品が出土しました。

向山遺跡は、北側から東側にかけて流れる黒目川を臨むことができる台地縁辺部に位置し、朝霞市の遺跡の中でも屈指の複合遺跡です。その立地の良さからか、今回の調査でも、古くは約27,000年近く前の旧石器時代から近世以降までと、非常に長期間に渡り人々の生活痕が見つかりました。

旧石器時代の遺物として見つかった黒曜石は、石器とともに剥片（石器を作るときにでる破片）が多く出土し、この場所で石器を作っていたことが想定されます。

続く縄文時代では、屋外炉や、焼けた痕跡の残る石が集中している集石遺構など、旧石器時代から連続して生活していたものと思われる痕跡が確認できました。



向山遺跡第10地点 位置図

弥生時代は、住居跡の他、方形周溝墓と呼ばれる埋葬施設の周りに溝を四角く掘ったお墓が5基確認されました。埋葬施設自体は後世の削平等により消失しており、検出されませんでした。

5基のうち2基は大型の方形周溝墓であり、1辺15m前後を測り、当調査地点より西側に位置する向山遺跡第4・5地点で検出した方形周溝墓と規模が同等であり、造られた方角も同じなど、何かしら関連がある可能性が考えられます。

また、溝跡から大型の壺形土器が一定の間隔で出土しました。これらの土器は、供献土器（底に穴をあけるなど実用的でない葬送儀礼用の土器）と考えられ、方形周溝墓が造られた当初は、溝に沿って地上部分に置かれていたものと考えられます。その後、時がたち、溝が埋まっていく過程で、土器が溝の中へ転がり落ちた様相が出土状況から見受けられました。



調査地点から黒目川を臨む



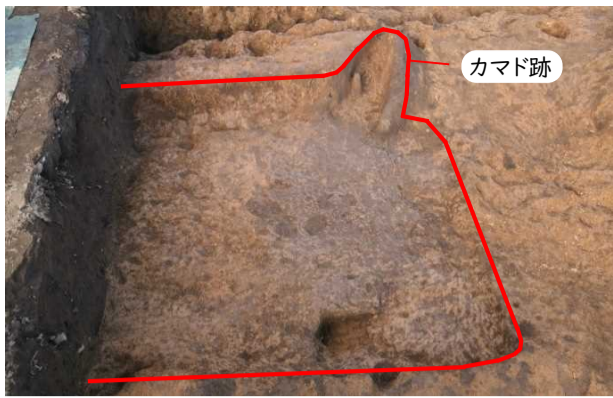
溝跡から出土した壺形土器



検出した方形周溝墓



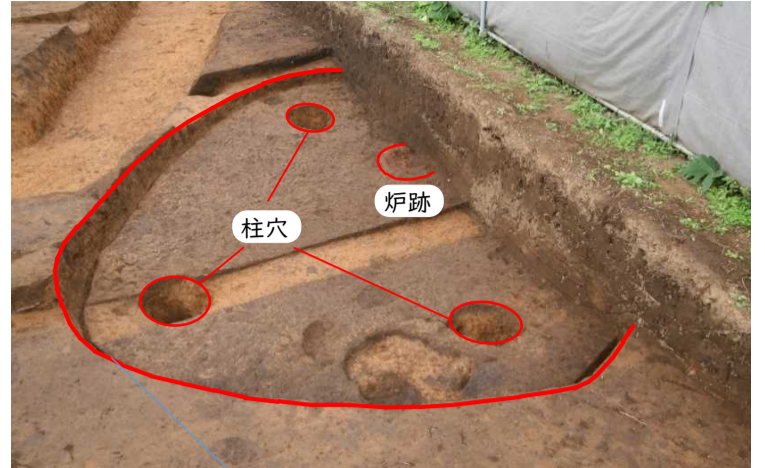
溝跡から出土した壺形土器



カマド跡



むさしのフロントあさか



弥生時代の竪穴住居跡

平安時代の竪穴住居跡



縄文時代の集石遺構

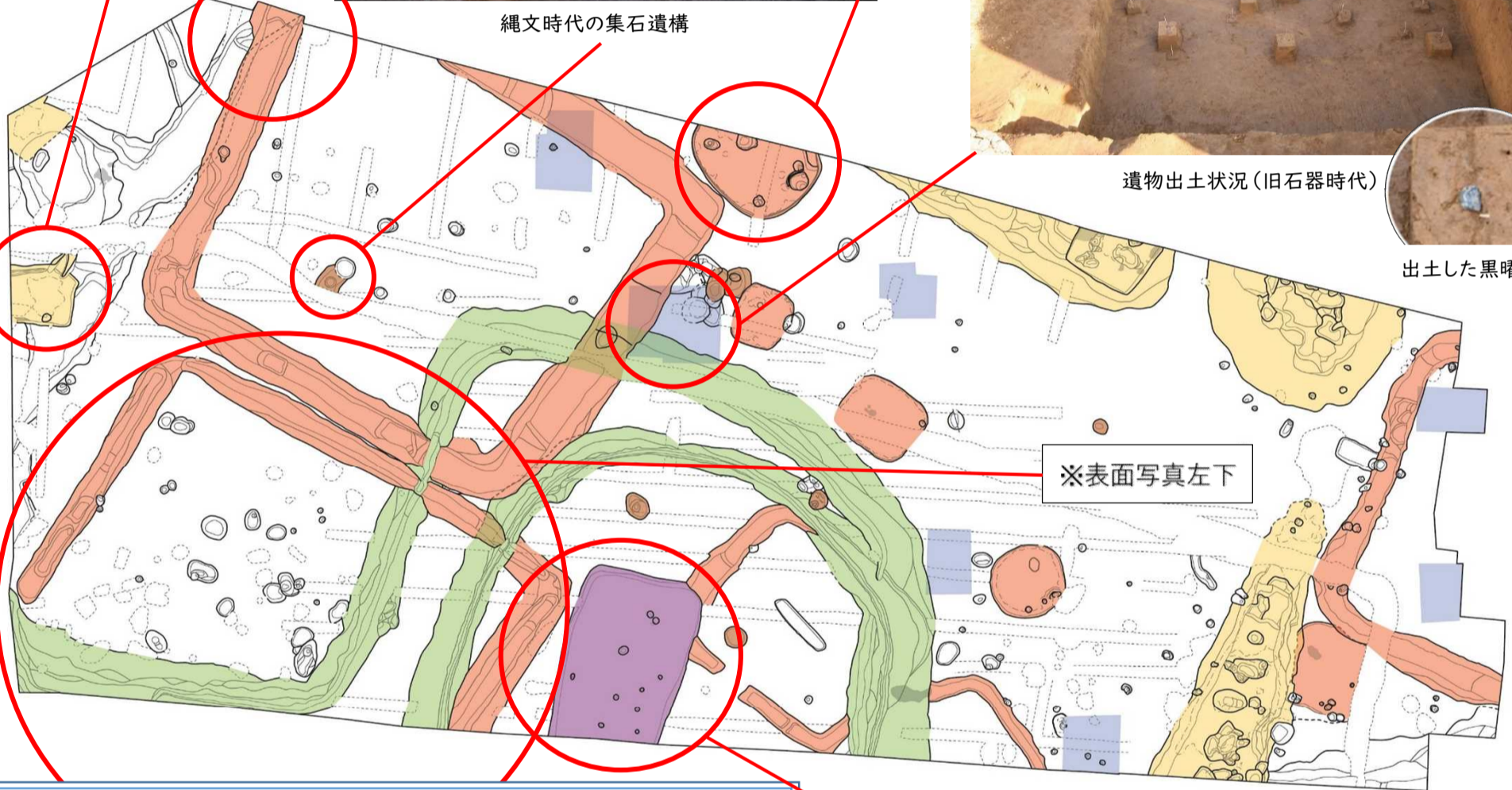
※表面写真右上



遺物出土状況(旧石器時代)



出土した黒曜石



※表面写真左下

平安時代は、竪穴住居跡から土錘（土で作った重りで、漁網につけ使用していたと考えられている。）や、カマドに据えた甕を支える土製の支脚等が出土しています。

また、正確な時期や性格が不明な遺構として、隅丸状の長方形を呈した大型の土坑が確認されました。特筆すべき点は覆土（堆積している土）の状況で、ローム土を中心とした薄い層を何層も突き固めた状態で埋められていました。これは、版築（はんちく）と呼ばれる工法で、本瓦葺きにより屋根が重くなる寺院等の建物を建築する際に、基壇（きだん）や基壇下に使われ、建物が重量物を支えられるよう行われる工法です。

しかし、この本遺構からは遺物が何も出土しなかったため、その詳細は一切不明です。ただ、版築跡が残されていたことから、この地にそれなりの重量がある建物が建っていた可能性が高いことは推測できます。

かつては、どんな建物が建っていたのか、興味深いところです。

- = 旧石器時代
- = 平安時代
- = 縄文時代
- = 近世以降
- = 弥生時代
- = 時期不明



隅丸状の長方形を呈した大型の土坑



大型土坑内の覆土(版築の状況)